山﨑　恵澄
富山県黒部市立高志野中学校３年

僕は、９月１４日～１７日の間に行われた、四島交流訪問事業に参加しました。今回は、北方四島の中で面積が一番大きい択捉島を訪問し、現地の住民との交流など、たくさんの体験をすることができました。

我が国固有の領土である歯舞群島、色丹島、国後島及び択捉島の北方四島は、７０年以上にわたり今もなおロシアが法的な根拠もなく占拠し続けています。日本政府は、日本国民がロシアのビザを取得して、北方四島へ入域することは、「北方領土は我が国固有の領土」という日本政府の立場と相容れないため、今回の訪問も「ビザ無し」ということになっています。北方四島へは、北方四島交流等専用船舶である「えとぴりか」を使用しました。根室港を出港した時は、船が少々揺れましたが、４日間の船での生活は快適に過ごすことができました。

国後島での入域手続を終え、択捉島へ向かう船中で、元島民の武田勝三さんから「元島民が語る北方領土」と題して話をうかがいました。ソ連軍が攻めてきた時に、お姉さんが男の格好をしてソ連兵から守ったことなど、今の僕たちには想像もつかないような大変なことがあったんだと知りました。また、武田さんの家にロシア人と一緒に生活していたという話もあり、身の回りのことがすごく変化したんだなと思いました。

９月１４日の夜には択捉沖に到着し、１５日の朝に択捉島に上陸しました。はしけに乗り換え港に到着し、車に分乗して移動しました。僕の乗った車は「ホンダ」の車で、バス以外は全て日本車でした。博物館を見学し、すぐにロシア人との交流があり、製作活動やスポーツなどを通じて、現地の多くの小学生や中高校生と知り合うことができました。午後からは、別飛へ移動し、日本人墓地の墓参や「クリリスキー・ルィバク」の水産加工場を見学しました。移動の車中は元島民の武田さんと同じだったので、択捉島について、講演だけでは分からなかったことを質問することができました。ロシア人の住んでいる家の構造がとても粗末なものであるとか、今までに、日本が様々な支援を行ってきていることなどを伺いました。

水産工場見学の後、紗那の商店街を散策しました。商店街といっても店は数軒しかなく、日本語も書いていないので、買い物に大変困りました。かろうじて賞味期限は分かったので、なるべく注意して買いましたが、店においてあるもののほとんどが賞味期限間近だったので驚きました。択捉島に泊まることなく、はしけで「えとぴりか」に戻り宿泊しました。択捉島にはホテルもあるのになぜ島で泊まらないのか不思議でした。

２日目の１５日には、択捉島に再上陸し、紗那の墓地を墓参しました。小高い斜面にロシア人の墓に混じって日本人の墓が多くあり、択捉島では、かつて日本人が普通に生活し

ていたことを改めて感じることができました。紗那墓地の日本人の墓は、昭和２０年８月までに亡くなられた方の墓であることが分かりました。それから紗那の町を散策しました。昔の町の中心部を歩いて回りました。現在は使っていないそうですが、小学校の建物が今も残っていたのにはビックリしました。郵便局があった場所も通りましたが、現在は建物が解体され、空き地になっていました。武田さんが「立派な建物で、保存することを申し入れてきたのに･･･。日本人が暮らした証がまた無くなってしまった。」と残念がっておられました。

次に紗那川上流へ移動し、鮭の孵化場を見学しました。この孵化場では、戦争前に日本人が建設したコンクリートの土台が今も使われていました。７０年以上経っているのに現在も使われているなんてすごいなと思いました。紗那川にはたくさんの鮭が泳いでいてすごかったです。ただ、案内してくれた方の話では、近くに熊がいるらしく、この日の朝も熊が鮭を捕って食べた後があったそうで、熊が出てこないか少し不安になりました。

午後からは、ホームビジットで、ロシア人の家庭を訪問しました。訪問したのは、ドロジナさんという女性のお医者さんの家で、大学生の娘さんも一緒でした。娘さんは、この時期はアルバイトで島の水産加工場で「いくら」を加工する仕事をしているそうです。大学が始まれば大陸に戻ると言っておられました。ロシア語は難しく、何とか「生活」や「教育」など、身近な話題でたくさん会話することができました。

夕方からは、町のレストランで夕食交流会が行われ、僕たちと同じくらいの歳のロシア人と積極的に交流し、相互理解の増進に心掛けました。

この訪問を通して、思っていたよりも領土問題を解決することは難しいと感じました。島へ初めて上陸した時は、まるで外国のような感じがしました。現在の択捉島では多くのロシアの人々が普通に生活を送っています。その風景を見て、かつて日本人が住んでいたとは思えないと感じることがありました。７０年もの長い間占拠されていて、問題を解決できていないのだから、本当に深刻な問題だと改めて感じました。

「四島交流は領土交渉の場ではない」ということを十分に理解して訪問したので、本来の目的である、日本とロシアのそれぞれの生活や文化について互いに理解し合い、交流できたことはよかったです。

北方領土を見てきた者として、まずは、北方領土についてみんなに深く知ってもらえるよう、今回の旅で見聞きしたことをみんなに伝えていきたいと思います。

このような機会を与えていただき、ありがとうございました。